



特定非営利活動法人

アジア・アフリカと共に歩む会

南アフリカ共和国貧困地域への教育支援

TAAAの活動日誌 2007年

- ・ 2007-12-3 [平林薫の公開対談イベントレポート](#)
- ・ 2007-12-2 [2007年第2回のTAAA報告会とレポート](#)
- ・ 2007-7-9 [2007年第1回のTAAA報告会を開催](#)
- ・ 2007-6-23 [新たなJICA委託事業が始動します！その名も…](#)
- ・ 2007-5-30 [本とサッカーボールが到着](#)
- ・ 2007-5-28 [アフリカンフェスタ2007にご来場ありがとうございました！](#)

2007年12月3日

『南アフリカ座談会～アフリカの大地に生きる二人の女性が語る～』を開催しました

(特活) アフリカ日本協議会 (AJF)、(特活) 日本国際ボランティアセンター (JVC)、アジア・アフリカと共に歩む会 (TAAA) は、11月28日(水)の19時から21時まで、JICA地球ひろばにて「南アフリカ座談会～アフリカの大地に生きる二人の女性が語る～」を開催いたしました。内容は盛りだくさんで、JVCの津山直子とTAAAの平林薫による現地報告、AJFの林達雄を加えた3人による対談など、多岐に渡りました。

まず、TAAA代表の野田千香子より、今回の座談会の主役である二人の女性、津山直子と平林薫の紹介が行われました。両人とも、同じ時期ではありませんでしたが、当時御茶ノ水に事務所があったアフリカ民族会議 (ANC) で働いた経験があり、これを契機に南アフリカへ旅立ちました。津山直子は当初反アパルトヘイト活動に従事していましたが、1994年の総選挙後は南アフリカ支援へとシフトして現在に至っています。一方、平林薫は旅行や撮影関係など様々な仕事に携わりつつ、2000年からTAAAの現地担当もつとめています。

JVCの現地報告は、津山直子が実際に関わっている具体的な人々の名をあげながら行われました。JVCは現在、イースタンケープ州とリンポポ州を中心に活動を展開中です。主として前者では環境保全型農業 (有機農業) を行っており、後者ではHIV/エイズ関連事業を実施しています。環境保全型農業では、「畑の多様性」「有機肥料」といった9つの指標を設定し、参加型モニタリングをして着実に成果をあげています。一方HIV/エイズ関連事業では、日本のNGOである特定非営利活動法人シェア=国際保健協力市民の会と共同で活動しています。

TAAAの現地報告は、過去の活動と現在の「学校菜園プロジェクト」に焦点をあてて進められました。TAAAの主な活動は教育支援であり、英語の図書や移動図書館車を南アフリカに送りつけています。特にクワズールーナタール州では現地NGOのELETをパートナーとし、従来の教育支援に加え、2003年からはJICAの助成を受けてHIV/ピア (相互) 教育を展開して

きました。そして今年6月から、同じく J I C A の助成を受けて「学校菜園プロジェクト」がスタートしています。これはインドウェドウェ地区の20校で進められており、キャベツ・トマト・ビートルート（赤カブ）などが育てられています。これらは子どもたちの給食栄養改善につながるだけでなく、コミュニティ支援に拡大する可能性を秘めています。

両 N G O による報告が終わったあと、J I C A の仁田様から感想を頂きました。J V C も T A A A も J I C A の草の根協力支援の助成を受けており、仁田様は1ヶ月前に現地のプロジェクトを視察されています。どちらの活動も、たとえば物を大量に配布するような派手なものではありませんが、現地の方々が今後も無理なく進められるような根をはったものになっているということで、高い評価を頂くことができました。

最後に、今回のメインイベントである対談が行われました。南アフリカで10年以上生きてきた二人の女性に加え、元 J V C 代表で現 A J F 代表の林達雄がコーディネータとして加わりました。話はつきず、両女性が南アフリカに関わるようになったきっかけ、今南アフリカで大きな問題となっているエイズ、農業とエイズ対策を一緒にやる意義、子どもたちの様子、J I C A への感謝など活発な対談となりました。また、後半は参加者にもマイクを向け、10数名の方から様々なご質問を頂きました。

当日は平日の夜にもかかわらず、約60名の方にご参加いただきました。今後とも A J F、J V C、T A A A へのご支援、そして南アフリカへの声援をお願いいたします。ありがとうございました。

丸岡 晶

[▲トップへ](#)

2007年12月2日

2007年度第2回のTAAA報告会を開催

<南アの現状>

講演とワークショップ「南アフリカの子どもたちと共に歩む」を開催2007年11月25日14時より、埼玉県労働会館4階会議室（さいたま市浦和区）にて、講演とワークショップ「南アフリカ（以下南ア）の子どもたちと共に歩む」を開催いたしました。講演については、南ア事務所 代表の平林薫を迎えて定期的に開催しておりますが、今回は色彩豊かな写真をプロジェクタで映しながら話を進めたため、大変臨場感あふれる講演会となりました。

第1部の講演では、今年6月からスタートした「学校菜園プロジェクト」（JICA草の根技術協力事業）の報告が行なわれました。このプロジェクトは、南ア東部に位置するクワズルーナター州（KZN州）の20校を対象に行なわれています。元々、南ア現地のNGOであるELETが学校での栄養改善を目的として行なっていましたが、イナンダ地区のマンドシ小学校での効果が高く評価され、JICAの支援を受けて対象校を拡大いたしました。

育てている野菜の種類は、キャベツ・にんじん・じゃがいも・玉ねぎ・トマト・ビートルート（赤カブ）など多岐にわたります。学校および生徒の協力があり、特に今年は雨がよく降ったことか

ら、現在のところ順調に展開しています。マンドシ校は、TAAAから州教育省に寄贈された移動図書館車のプロジェクトに参加することによって図書活動が始まり、TAAAから学校に直接届けられた英語の本や教材も活用し、どんどん学校が変わってきています。今年初めにはTAAAからの支援金によって本棚を購入し、念願だった図書室を開設することができました。

第2部のワークショップでは、参加者10数名が2つのグループに分かれ、自由にディスカッションをいたしました。自己紹介・第1部の感想から入り、お互いが感じていること、疑問に思っていること、今後の課題などについて話し合いました。皆さんの共通認識として、「今回のプロジェクトは特にうまくいっており、支援を拡大しやすい」「政府に期待するだけではなかなか改善が難しく、やはり現場で一緒に動いていくことが大切であり、支援の実感が持てる」「雇用を拡大しないと底辺の人々の生活がなかなか向上しない、今回の学校菜園プロジェクトをコミュニティに広げれば、農業という産業の発展や雇用の促進にもつながる」といった意見があがりました。次回の報告会は未定ですが、今後も定期的に開催してまいります。ぜひお誘い合わせの上お出てください。そして、南アの子どものため、引き続きTAAAへのご支援をよろしくお願いいたします。

丸岡 晶

[▲ トップへ](#)

2007年7月9日

2007年度第1回のTAAA報告会を開催

2007年7月7日、たなばたの日に今年度第一回目のTAAA報告会を開催しました。講師はダーバン在住10年を数える平林薫TAAA南ア現地代表。織姫と彦星は、かささぎが列を作って天の川にかけてくれる橋を渡って逢うそうですが、南アと日本をつなぐ小さいけど懸命な一羽のかささぎとして、TAAAは頑張っています。南アからこの日のために帰国した平林さんは、困難な中でも常に希望を燃やしていて、お話していると元気が湧いてくる素敵なお人です。講演の内容を送ってくれましたので、かなり長文になりますが、全文をご紹介します。

<南アの現状>

南アでは、ワールドカップの準備や鉱物資源の価格の高騰などから、景気は上昇している。ところが、国の総人口の43%が年収R3000以下（5万5千円くらい）という統計が出た。南アは大変物価が高く、レストランで食事をすれば1人R100はかかるし、町中のごく普通のアパートの家賃が月R3000程度であることから、年収R3000以下ということがどんな状況であるか想像できると思う。また、国の総人口4600万人のうち、約4分の1の1200万人は年金や子供への援助金などの社会保障に頼って生活している。南アはインド、ブラジルなどと同様に世界で最も貧富の差の激しい国の一つである。

先進国並みに豊かで活発な経済活動に黒人が組み込まれることを目的とした、BEE（Black Economic Empowerment）というプログラムがあるが、これによって元ANCリーダーなどの有名人たちや海外で勉強して帰国した人々など一握りのエリートが巨額の報酬を得ることができただけで、今のところ、大きな規模での雇用創出や、一般の人々の経済活動への参加を促すには至っていない。結局、経済システムはアパルトヘイト当時とほとんど変わっていないといえる。多くの労働

者は薄給で重労働をさせられるが、文句を言えば“辞めてもらって結構、職につきたい人はいくらでもいるのだから”と言われる。失業したくなければその職にしがみつくなければならない。近年、ジンバブエやモザンビークなど近隣諸国からの移民が流入し、悪徳経営者はもっと安い賃金で彼らを使っているため、“外国人に職を盗られる”と、外国人への偏見や憎しみが生まれていることも懸念される。

今年に入って様々な局面でデモやストライキが起きるようになった。まず発端は州の境界線にある町での問題。クツオンという町がハウテン州から北西州に移されることになったのだが、住民は十分な知らせを受けておらず、豊かな州から、プラチナ鉱山があり豊かではあるがマネージメントがうまくできていない州に移されることに反発し、抗議行動を始めた。町の役所は焼かれ、町長や幹部は脅され、学校や公共のオフィスが閉鎖となった。問題が大きくなった3月以来、この地域の学校は閉鎖されたままである。

また、デモやストが少しずつ暴力的になってきているような気もする。そして、それらの抗議行動に対する警察の対応がアパルトヘイト当時を思い起こさせるようなものなのだ。つい最近も、ダーバン中心部の路上の行商人たちが警察の手入れに遭い、使用料を払っていないとか、許可されていない場所ではないとかの理由で商品を強制的に没収された。これに反発して抗議行動を行った人々に対し、警察は催涙ガスや放水砲を使い、25人が逮捕された。彼らが裁判所に出頭する日、裁判所前に人々が集まり再度抗議行動を行ったが、ここでも警察は催涙ガスで群集を鎮圧し、500人が逮捕された。多くは女性で、逮捕される際にバトンで強く叩かれた人もいる。人々は、“これはダーバン市がワールドカップに向けて我々を路上から追い出そうとしているのだ”と話す。これが本当かどうかは別としても、弱者を切り捨てる傾向が見られることは確かで、ますます政府と一般市民との間で対立が深まってきているように感じている。

6月1日から一ヶ月公務員のストライキが続き、社会に大きな影響を及ぼした。看護師のストにより病院のスタッフの数が減ったため、軍隊が出動し、看護に当たったり、重病患者は軍の病院に搬送されたりした。このストの直接的、間接的な影響で亡くなった患者も出ている。教員のストによる一ヶ月の学校閉鎖も後々まで後遺症を残すことになりそうだ。組合のメンバーである教員たちは“Too nice for too long”長い間我々は我慢しすぎた、というコメントを発表し、組合は政府に12%の昇給を要求した。

<学校の現状>

これまで特に地方の学校を訪問し、厳しい環境の中で仕事をする教員たちを見てきて、このままではいつか彼らの我慢の限界が来て、不満が爆発するのではないかと危機感を持っていた。民主的な国家として再スタートして13年経ち、政治的なシステムが変わり、国としての経済も発展している中で、取り残されてしまっている地域や人々はどうなるのか。私自身も、日々の生活の中で憤りを感じる場面が多くなってきている。

教員のストに関して、学校訪問で現場を見ている私は教員を応援したい気持ちである。しかし、学校を一ヶ月閉鎖するという事は、より弱い立場の子供達を犠牲にしていることになる。ただでさえ設備もひどく、リソースも乏しい学校に通わざるを得ない子供たちは、今年一年分の課程を終わらせることができるかどうか、という危機的な状況だ。“僕たちは教室に戻りたい”とケープタウン近郊の黒人居住区の子供たちがデモを行ったが、その姿は、アパルトヘイト政権の下での教育に抗議をした“ソウェト蜂起”を思い起こさせた。偶然にも同じ6月に起こっている。

私たちが共に活動しているダーバンのNGO、ELETのマーヴィン・オグル代表とこの問題について意見を交わした。オグル氏は教員たちの行動には賛成できないという。彼はプロジェクトを通して、

やる気も向上心もなく、生徒たちのことを真剣に考えているとは思えないような教員を多く見てきたという。そのような教員に限って“政府は何もしてくれない”とか“この学校は貧しくてリソースが乏しいから授業にならない”などと言い訳をする。しかし、学期初めに練習帳を提供しても学期末には1ページしか進められないような教員がいて、理由を尋ねれば“忙しかったから”と言う。そんな教員は今の給料だって高いくらいだ、と話していた。確かに、私も移動図書館プロジェクトでそのような学校や教員たちに出会うことがあるが、その多くは、校長が休みがちで、自分のことばかり考え、不満や文句ばかり言っていて、教師たちはやる気をなくしているように見えた。南アでも教員の仕事は自分の使命と思っている、という多くの声を聞く。そのような教員たちがモチベーションを失ってしまうような環境、待遇であるというのは間違っていると思う。オグル氏も、問題なのは給料の額だけではなく、もっと根本的な部分の改善なのだと思う。

何より深刻なのは政府の問題。国も州も、政府には予算もあり、スタッフもいる。しかし、トップが決定した立派な法案を理解し、実行に移す力のあるスタッフはどれほどいるか。部門内での連絡もとても悪く、誰かが休暇や離職してしまうと全く物事が進まなくなってしまうこともある。国も州も役所には人が多すぎて、効率的な仕事を行えていないということも問題。また、大臣、副大臣、長官、副長官、担当部長など幹部は、一般スタッフの10倍、20倍の給料をもらっている。このようなあまりに不公平な賃金体系を見直し、現在資格や年数だけで規定されているレベルを実際の能力や取り組みで査定できるようなシステムの導入や、仕事に熱心で効率を上げているスタッフには何らかの報酬や昇給のアップ率を変えるなどモチベーションを高める工夫をするべきではないだろうか。単純に昇給率だけを争点にしている政府も労働組合ももっと根本的な問題について話し合うべきだ、と話し合いはヒートアップした。

もちろんトップばかりが責められるわけではないが、リーダーである以上、下にいる人々のことを真剣に考えている姿勢は見せて欲しい。今回の公務員のストライキが続いている間も、担当する公務省の大臣以外はまったくこの問題に触れようともせず、まして“自分たちの給料を削ってでも教員の給料に充てようではないか”などという話は教育大臣を含め一切聞かれなかった。それどころか、大統領以下、大臣たちに30%程度の昇給を予定している。

<移動図書館と本の寄贈活動に関する報告>

3月19日に、TAAAが寄贈した移動図書館車が巡回しているKZN州イナンダ地区のマンドシ小を州教育省のクロニエ大臣が訪問された。事前に移動図書館スタッフから連絡を受けていたので、私も同席した。大臣はTAAAが移動図書館バスを寄贈していることはすでに知っていたが、このマンドシ小にTAAAが直接行っている本の寄贈、日本の小学校との絵の交換、そして学習院高等科からの寄贈による本棚の寄贈で図書室が開設されたことなどを見て大変驚いていた。日本の支援者の方々にくれぐれも感謝の気持ちを伝えて欲しいと依頼された。TAAAのGENEROUS(気前のよい)、QUIET(地味な)サポートに感謝しているという言葉には、まさに私たちの会を理解してもらえたような気がした。実はその前の週にアメリカのトークショー司会者、オブラ・ウィンフリーがKZN州と東ケープ州の境界にあるコクスタッドという町に立派な学校を建設し、開校式があった。校舎などの設備は州教育省の管轄下なので、本来このような事業は教育省が行うべきであるから、このように派手な支援を受けるということは、まるで州が何もしていないように採られる可能性もあるわけだ。新聞記事によると、式典でのクロニエ大臣のスピーチは、“州教育省は予算もあり、着実に学校建設を進めている。もちろん、このようなサポートは歓迎する”というようなものだった。南ア政府は、自国の立派なシステムを誇るばかりでなく、そのシステムが機能していない部分に関しては素直に認め、内外の支援を受けながらサービスを迅速に供給していくべきだ、と思う。

5月にはジョハネスバーグに出張した。まずメソジスト教会の教育支援NGO、MEIの移動図書館車プロジェクトを訪問した。3月末で司書のアリソンさんが辞任し、4月から新たにメーガンさんという元教師で牧師さんの奥さんが引き継ぎ、訪問したときはちょうど各校に新任のあいさつを兼ねて巡回しているところだった。前任からの引継ぎでも指摘されていた問題として、巡回校の中で貸し出し数にばらつきがある、つまり学校によって図書活動への取り組み体制がばらばらであるという点について話し合った。その日は3校回ったのだが、その一日だけでも、問題がはっきりと見えてきた。最初の学校は大変活発に活動が行われており、先生方も“待ってました”とばかりどんどんやってきて、1人何十冊も借りていった。ところが3校目では1時間以上待たされて、結局2,3人の教師が2, 3冊ずつ借りていっただけであった。メーガンさんは、そのように教師が熱心でない学校は、生徒たちにはかわいそうだが巡回をストップし、バスの巡回を希望している、熱意のある他の学校にチェンジしていこうと思っていると話していた。

南アの黒人居住区の中では最大で、大都市ジョハネスバーグにあるソウェトでは、ショッピングセンターや住宅建設などの開発が進んでおり、海外からの様々な支援も集まってきている。しばらくぶりのソウェト訪問だったので、すでに学校の設備はかなり整ってきているのではないかと思っていた。しかし、私が訪問したSOMOHOというNGOのある地域は中心部から離れていることもあり、あまり変化は見られなかった。TAAAは昨年11月にSOMOHOが支援している7校に30箱の本を寄贈した。今回、代表のマンドラ・メントゥールさんがそのうちの4校に案内してくださったが、やはり学校によって図書活動に違いが見られた。

一校は図書室がなかったため、本の寄贈を機に教室を図書室に改装している。ただ、本の数も少なく整理の仕方もわからないため、教師たちはサポートが欲しいという話をしていた。生徒たちはこの簡易図書室に出たり入ったりして活発に読書をしているようで、TAAA寄贈の本を使って読書コンクールを計画している。もう一校はグレードRから4（日本の幼稚園から4年生まで）の学校で、ちょうど絵本がたくさん入った箱を受け取ったと喜んでいて、ここは図書室もあり、毎週金曜日の朝礼の際に、生徒の代表が前で本を読むという活動が行われているという。またもう一校では、河合塾さんから寄贈された高校一年生のリーダーの教科書が有効に利用されていた。同じものがまとまって送られたので、グレード7（日本の中1）のクラス全員に一冊ずついきわたり、本文や練習問題を活用していた。写真や情報も多いため、教師はとてもいいテキストだと話していた。

学校訪問の後、SOMOHOサッカークラブの活動を見に行ったら、活動はメントゥール氏の自宅兼オフィスの近くにある高校のグラウンドで行われている。この高校の設備はひどく、校舎の窓ガラスは割れ、敷地内はゴミだらけ、何の活動もなく3時には誰一人いなかった。このような解決のめどもつかない問題を抱えている状況の中で、グラウンドでボールを追って走る子供たちの姿は唯一の光である。西日の当たるグラウンドで子供たちが真剣に練習する姿を見て、メントゥール氏は“スポーツはいいね。傍からはお金にならないことをよく続けているな、と言われるけれど、子供たちのこの姿が見たいからなんだよ”と話してくれた。このような気持ちで活動を続けているSOMOHOとは、これからも協力し合っていきたい、と思った。

<JICA草の根技術支援プロジェクト>

JICA草の根技術支援金で先月から開始となった“学校菜園プロジェクト”の行われる場所は、ンドウエドウェというダーバンから北西に60キロほど入ったところに広がる地域で、周辺は小高い丘にサトウキビ畑が広がる、一見のどかで美しい地帯だ。都市部からそれほど離れていないが、水道、電気などの基本的なインフラもまだ整っておらず、これといった産業がないため、この地域だけ見ると失業率は50%を超えていると言われる。TAAAは2003年からJICAの支援金で、現地NGOのELETと共に、この地域の15校でHIV/AIDSピア教育プロジェクトを行った。プロジェクト参加校

では、生徒たちがAIDSという病気に関する知識はもちろん、AIDSへの偏見をなくすことや性に関する知識、学生としての生活態度などを学んだ。学校からは“妊娠する生徒がいなくなった”とか“地域に出てHIV感染者や何らかの影響を受けている人たちへのサポートが行われるようになった”などの報告があった。また、プロジェクトでは衛生や環境を含めた健康教育を行い、各学校では健康クラブを設立して活動を行った。そのため、参加校では校庭の清掃や花壇作りなどによって校内が大変きれいになった。このような活動を行ううち、今回の学校菜園プロジェクトの効果と必要性を認識し、学校側からも是非プロジェクトを行いたいという依頼を受けた。ちょうどELETはすでに他の地域での同様のプロジェクトを行い、成果をあげていた。それはダーバン周辺のイナンダ・ントゥズマ・クワマシュという3つの黒人居住区の頭文字をとってINKプロジェクトと呼ばれ、2年間で60校が参加した。移動図書館が訪問しているマンドシ小もプロジェクトに参加し、菜園から採れる見事な野菜は給食に利用されている。

南アの経済格差による貧困の問題は、犯罪や病気など、あらゆる問題との悪循環を起こしている。学校菜園プロジェクトでは、学校菜園における野菜の収穫によって学校給食の量と質が向上すること、教師や生徒たちが野菜作りの基礎知識と技術を学ぶこと、そしてコミュニティーの人々がたとえ小さな規模であっても農業に従事する機会を得て、自足していけるようになることを目指している。ELETのオグル代表は、“延々と続く荒地のほんの一角に花を咲かせるようなものだが、時間をかけてその花が少しずつ広がっていくと信じて活動している”と話している。TAAAはELETと同じ信念、理想を持って、今後も協力して活動を続けていきたいと思っている。次回の報告会では、学校菜園プロジェクトの進捗状況についてお話ししたいと思います。

<まとめ>

南アが民主的な国家として大きな変革を成し遂げ、立派な憲法をもち、アフリカ大陸のリーダーとなっていることは紛れもない事実だ。しかし、民主的な国家であるならば、子供たちはある程度平等な機会を与えられ、その中で一人ひとりの個性で選択をすることができるはず。ところが南アでは能力があっても、お金がなければ当然受けられるべきレベルの教育が受けられない状況が続いている。このような状況を改善しなければ、結果として知識や技術を持った人材が十分に育たないということになり、大げさに言えば国の存続に関わる問題ではないかと危機感を持っている。今、自分自身を振り返ると、小学校から短大まで当たり前のように進んだ。けれども今、この“当たり前のこと”がどんなに貴重で、日本のような教育システムを持つことがどれほど大変なことなのかを改めて感じている。

最後にダーバンの牧師、ゲアリー・パーチェス氏の言葉を紹介したい。彼はかつて薬物とアルコール中毒のためホームレスとなり、ダーバン・アークというセンターで生活していた。ここで改心し、支援者から土地の寄贈を受け、広大な敷地にアラウナ・アークという自給自足を目指したセンターを設立した。センター内では菜園活動、木工などの技術指導も行なわれ、問題を抱えている人々の自立を促している。そんな彼が新聞のインタビューの中で、3つの大変重要な考えを述べている。まず1つは、“活動のマネージメントを効果的に行うには少ない人数で十分だ”これは是非南ア政府に聞かせたい言葉。2つめは、“助けを受ける人々は、自分たちでも立ち上がろうとする努力をしなければならぬ”。これは、“政府は何もしてくれない”と文句ばかり言い、何でもくれくれ、といった態度の教師たちに聞かせたい言葉。そしてこのセンターのモットーでもある、“いい人たちが何もしない社会に悪がはびこるものだ”。つまり、無関心への警鐘。これは南ア国内の裕福な人々はもちろん、日本や先進国の多くの人々に聞いてもらいたい言葉。私自身も常に自分には何ができるかを問い続け、行動していきたいと思っている。

2007年6月23日

新たなJICA委託事業が始動します！その名も…

TAAAの新たな教育支援プロジェクトが、JICA（独立行政法人国際協力機構、Japan International Cooperation Agency)の委託事業として正式に承認され、このほど無事に契約が締結されました。その名も…【南アフリカ共和国「クワズールーナタール州ンドウェドウェ地域の小学校における健康教育と菜園プロジェクト】といます。

この長〜い名前のプロジェクトは、TAAAと長く協同関係にある南ア現地の教育NGO、ELETと協力しあって、南アの小学校に学校菜園活動を普及させようというものです。この活動には3つの狙いがあります。

- 自分たちでものを生産する経験を通して、子供たちが成功体験と達成感を獲得すること
- 収穫された野菜を給食に使用して栄養改善をすすめ、子供たちに保健衛生・栄養の知識を与えること
- 保護者の関与を通じて、将来的に各家庭での菜園活動が活発化されること

ELETはすでになんかの学校で菜園活動を実施して成果をあげており、今回のプロジェクトではパートナーとして、そのノウハウを提供してくれます。移動図書館車プロジェクトでTAAAが培ってきた、学校を中心とする地域との密接な信頼関係のうえに、ELETが提供する菜園教育のノウハウを活用してプロジェクトを進めていくことで、より多くの子供たちが、自分たちのためにできることをやる知識、動機付け、材料を獲得できるようになります。TAAAの新プロジェクトを、ぜひ応援してくださいね！



先行して学校菜園を実施している、マンドシ小学校の給食風景。この写真では見づらいですが、給食に野菜が入るようになりました。給食以外に食事をとることのできない子供もいます。給食の使命は大きい！

※当初掲載した写真と説明に誤りがありました。お詫びして差し替えます。

2007年5月30日

本とサッカーボールがソウェトに到着！

実に久々の更新となってしまいました。更新は滞っていても(ごめんなさい^^);、TAAAは着々と活動を進めています。

「南ア最大の黒人居住区ソウェトのSOMOHO（希望の丘というNGO)に TAAAから送った本とサッカーボールが届きました。2007年5月に TAAA南ア事務所の平林薫がソウェトの5校を訪ねたところ、本もサッカーボールも大歓迎されていました。ここでも本は希少で、図書館にも遠いので、移動図書館バスがほしい という要望を貰いました。」



さて、ここでクイズです。TAAAからのボールを追う子供たちの写真、良く見るとお腹を出している子供たちがいます。さて、彼らはなぜお腹を出してサッカーをやっているのでしょうか？

新ブログでは、ボールを追いかける子供たちの様子をもっとご紹介しています。

野田・武山

2007年5月28日

アフリカンフェスタ2007、ご来場ありがとうございました！

5月19日、20日の二日間、東京・日比谷公園で開催されたアフリカンフェスタ。初出展のTAAAのテントに、たくさんの方が足を運んでくださいました。本当にありがとうございます！テント内では私たちの移動図書館車の活動を紹介し、テントの前では南アのビーズ編みアクセサリーや書籍、会報などを販売させていただきました。

初日の土曜日はかなりひどい雨に見舞われてしまい、まず設営に一苦労でした。TAAAのテントは緩やかな坂になった歩道沿いにあったので、上流から雨水が流れてきてしまうのです。しかし我らの副代表、浅見さんの知恵で水浸しは免れ、無事、設営に成功しました♪（浅見さんは作業場ではひたすらユーモア担当に徹しているけど、縁の下の力持ちで、大阪から移動図書館車を運転してきたり、整備してくれたりと、頼れる人なのです！）

二日目は一転して、五月晴れの行楽日和。フェスタは大変な賑わいで、地図があるのにテントにつくまで迷うくらいでした。午後にはステージを使って、浅見さん下谷さんからTAAAの活動についてのレクチャーも行われました。聞いてくださった方からは「わかりやすくてよかった」とまずまずの評判を頂いたようです。プロジェクターに南アの写真を映し出してレクチャーをする予定が、パソコンの調子が悪くなってしまったそうで、バスの到来を喜び子供たちの笑顔をご紹介できなかったのは残念！ライブならではのハプニングもまた楽し！？

TAAAのビーズ編みは、女性のお客様に大人気。普段使いにしやすいシンプルなチョーカーから、薄着の季節でもしっかりアクセントになる華やかなボリュームタイプ、そしてアフリカ的なセンスを感じさせる女王様の装飾のようなものまで、南アの女性たちが工夫を凝らした作品が多種多彩に取り揃えられていました。南アフリカ大使館の方がお見えになって「大使館よりたくさん揃えていますね！」と驚いたほどでした。「どれにしようか迷っちゃう～！」という声がたくさん聞かれました。それにしてもやけに女性がたくさん通るなあと思っていたら、あとで気づいたのですが、食べ物屋さんをやっている団体のエリアがすぐそばだったんですね！なるほど…と妙に納得してしまいました（笑）

お買い物を楽しまれる方、活動についての説明を興味深げに聞いてくださる方、いろんな人との出会いが楽しいフェスタでした。来年もまた参加できるかな？TAAAとちょっとでもご縁のある人が、どんどん増えていきますように！



アフリカの美味も堪能しましたっ。ムードメーカー西村さんと初日のフェスタ遠景



テント内から撮影。お客様が足を止めてくれてます！わーい(^▽^@)



遊びに来てくれてありがとうございました♪

とかげ